この話は誰にも喋ってはならぬ！

小説吉田学校

製作■山本又一朗
原作■戸川猪佐武

流動社刊・角川文庫版「小説吉田学校」
角川書店刊「小説吉田茂」「小説三木武吉」

森谷司郎監督作品

吉田　茂■森繁　久彌

鳩山　一郎■芦田　伸介
松野　鶴平■小沢栄太郎
幣原喜重郎■三津田　健
星島　二郎■伊豆　肇
林　譲治■土屋　嘉男
河野　一郎■梅宮　辰夫
広川　弘禅■藤岡　琢也
大野　伴睦■田崎　潤
石橋　湛山■里木佐甫郎
佐藤　栄作■竹脇　無我
池田　勇人■高橋　悦史
田中　角栄■西郷　輝彦
岸　信介■仲谷　昇
麻生太賀吉■村井　国夫
三木　武夫■峰岸　徹
福田　赳夫■橋爪　功
河本　敏夫■成田　次穂
福田　一■和崎　俊哉
増田甲子七■加藤　和夫
中井川隆一郎■鈴木　瑞穂
益谷　秀次■稲葉　義男
河野　金昇■御木本伸介
石田　博英■辻　萬長
西村　栄一■小林　稔侍
浅沼稲次郎■小池　朝雄

二階堂　進■山下洵一郎
宮沢　喜一■角野　卓造
太田　一郎■神山　繁
須永　一雄■石田　純一
中川　一郎■脇田　茂
竹下　登■下塚　誠
田中　六助■千葉　茂
安倍晋太郎■瀬戸山　功
海部　俊樹■福田　勝洋
渡辺美智雄■樋渡　紀雄
マッカーサー■リック・ジェイソン
中曽根康弘■勝野　洋
麻生　和子■夏目　雅子
緒方　竹虎■池部　良
（特別出演）
三木　武吉■若山富三郎

194172-202

4月9日(土)より東宝系大公開

日比谷映画街	ハチ公前	上野駅前
千代田劇場	渋谷宝塚	上野東宝
591 1716	461 8779	831 3431

■解説

映画「小説吉田学校」は被占領下の戦後日本の運命を賭けて政治の世界に生きた吉田茂を中心とする〝保守本流〟の実力者群像を、激動の昭和戦後史を背景に描く作品である。

戸川猪佐武のベストセラー原作を映画化するのは、『海峡』の森谷司郎監督。製作は『アメリカン・ヴァイオレンス』の山本又一朗。撮影・木村大作(『海峡』)。

戦後史の主人公・吉田茂に扮するのは、円熟・練達の名優 森繁久彌。はたして森繁がどのような〝吉田茂〟を見せてくれるか興味は尽きない。すべて実名で登場する吉田をとりまく人々には群像ドラマにふさわしい豪華な出演者が扮し、政治の世界の表裏に繰り広げられる真剣勝負の数々を再現する。

■物語

昭和二〇年、秋――東京は一面の焼野原と化していた。幣原内閣外務大臣・吉田茂は焼跡を見渡しながら娘の和子に言った。「この焼跡がいつになったら元通りの家並みになるか、二十年後にできるかどうか……」。

GHQ(連合国軍総司令部)の強力な統制のもと、混迷の中で時代は激変を続けた。東条英機以下五九名の戦犯逮捕、日本国憲法発布……。東久邇内閣に始まる短命内閣は、幣原内閣、第一次吉田内閣、片山内閣、芦田内閣とすべてGHQの命令ともいえる要求の中で総辞職を繰りかえしていた。

GHQ民政局次長チャールズ・ケージスは新内閣を野党第一党・民主自由党を中心とした連立内閣とすることを要望し、総理大臣には民自党幹事長・山崎猛が望ましいと伝えた。このケージスの発言は第二次吉田内閣が誕生するものと思い込んでいた民自党内部を大きく揺り動かした。筆頭副幹事長・広川弘禅は党顧問・星島二郎と組み、いち早く山崎内閣成立へ動いた。党長老・松野鶴平の強引な奇策、吉田の側近・林譲治の必死の巻きかえし、さらには党総務会における一年生議員・田中角栄の大胆な発言などによって形勢は逆転し、二三年一〇月一五日第二次吉田内閣が成立した。

吉田は運輸省事務次官・佐藤栄作を官房長官に抜擢した。吉田は佐藤に云った。「この吉田が総理として何をやろうとしておるか、わかるか」緊張する佐藤に吉田は言い切った。「講和だ。日本の独立だ。それができるのは、この吉田しかいない」

みずからの勢力を拡大するため議会の解散をはかった吉田はGHQ総司令官マッカーサーへの直談判に成功、昭和二三年一二月二三日第二次吉田内閣は解散した。翌二四年一月二四日の選挙において民自党は圧勝、この時以来吉田学校と呼ばれるようになる吉田派は大量の新議員を誕生させた。

昭和二四年二月一六日、第三次吉田内閣が発足した。米ソ間の緊張にともなうGHQの厳しい反共政策、それにつれて労働運動の火の手は一層高まり、政治スト・暴力ストが多発、下山事件・三鷹事件・松川事件などの不可解な大事件があいついだ。しかし吉田の目は講和会議と対日平和条約だけに向けられていた。吉田はまず平和条約草案の作製のために外務次官太田一郎を中心とするプロジェクトチームを極秘で結成、太田らは血のにじむ苦難の末、吉田の要求に答える草案を作り上げた。続いて吉田はふたたびマッカーサーと会見、池田勇人・宮沢喜一の渡米許可をとりつけた。アメリカの財政・経済の視察、それが二人の渡米の表向きの目的であった。しかし吉田が二人に託した密命はしかるべき人物を捜し出して、対日講和の下打合せをしてこいというものであった。二人は国務省ドッジ公使と接触することによって密使としての役割りを果した。

吉田の宿願を打ち砕くかのように昭和二六年六月二六日朝鮮戦争が勃発した。「もう講和どころではない……私の夢は破れた」消沈する吉田のもとにGHQからダレス国務長官顧問からの面会要請の至急連絡が入った。

ダレスは吉田に早期講和に賛成する旨を告げた。しかしダレスが出した付帯条件は吉田が到底飲むことのできない事、日本の再軍備であった。吉田は断腸の思いで警察予備隊の設置を認めた。こうして日米講和条約に向けて第一歩が記された。

当然にもその道は平坦なものではなかった。国内では、政敵・鳩山一郎の追放解除にともない謀将・三木武吉を中心とする鳩山派の動きが日増しにその不気味さを増していた。そしてアメリカは執拗に日本の再軍備を要求していた。しかしこれら内憂外患を突破して吉田を中心とした吉田学校のメンバーは昭和二六年九月八日、遂に対日平和条約調印を実現させた。それは日米安保条約とともに結ばれたものであった。

大磯の海岸を歩く吉田は池田と佐藤に言った。「私たちは日本の将来に向って、時間と力をかけて、多くの宿題を解いていかねばならん。おそらくほとんどの問題は、君たちの時代まで残される。君たちが解くべき宿題になる……」

対日講和が調印され日本国内は新しい政治局面へ向って動き始めた。吉田自身には鳩山・三木との宿命の対決が待っていた。解散・総選挙、政局の嵐はとどまるところを知らず吹き荒れた。そしてそれは吉田学校が生み出した保守本流の男たちの、互いが互いを食いあう新たな闘いの日々の始まりであった。

小説吉田学校

製作■㈱フィルムリンク・インターナショナル／配給■東宝株式会社

東宝

脚本■長坂秀佳
森谷司郎
撮影■木村大作
美術■村木与四郎
育野重一
録音■吉田庄太郎
照明■熊谷秀夫
助監督■中田新一
製作補■橋本利明
製作担当■桜井 勉
企画協力■
角川春樹事務所
音楽■羽田健太郎
主題歌■「少年達よ」
作 詞■小椋 佳
作曲・唄■堀内孝雄
(ポリスターレコード)